

マタイ10章39節 「失うから見出す命」

1A 天の御国と闇の国

1B 狼の中の羊

2B 主人の受けた仕打ち

3B キリストの告白

2A 平和でなく剣

1B 家族関係

2B 社会関係

3B 自己実現

3A 自己中心な社会

1B 「自分探し」の援助活動

2B 「自分探し」の弟子活動

3B 探せば失う原則

4A 失うから見つける命

1B キリストに満たされた生活

2B 真の喜び

3B 真の平安

本文

マタイによる福音書 10 章を開いてください。午後に 10 章を一節ずつ読んでいきますが、今朝は 39 節に注目します。「**自分のいのちを得る者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを得るのです。**」

ここは、直訳は、「自分のいのちを見出す者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを見出すのです。」となっています。「得る」というのが、「見出す」となっています。自分の命を見出すということ、それは現代社会で最も大事なことで、人々が飢え渴いている者と言えるでしょう。「自分探し」とも言われますね。または「居場所を見つける」という言葉もあるでしょう。「自己実現」という言葉もあります。こうしたものが「自分のいのちを見出す」ということになりませんが、イエス様は正反対のことを言われています。「もし、それを行なったら、かえって命を失うよ」と言われるのです。見出そうとすればするほど、その意味を失ってしまいます。

この矛盾するようなイエス様の言葉は、私たちがしばしば歌うヒルソングがつくった「天に触れる」です。「高見まで上り、地に落ちた時に愛を見つけた」とありますが、地に落ちた時に天に触れたというのが、ここでの真意です。自分は高められたいと思っていて、けれども落ちてしまった。その高

められて届きたいと思っていた天は、実は自分が地面に落ちてペツちゃんこになった時に、そこにあった！というものです。それが、「わたしのために自分のいのちを失う者は、それを見出す」ということです。

1A 天の御国と闇の国

このイエス様の言葉が、どのような背景で、どのような話でお語りになっているのか、全体を眺めたいと思います。イエス様は弟子たちをこれから、ご自分の権威を授けて福音を語らせるために、遣わそうとされています。7 節に、「行って、『天の御国が近づいた』と宣べ伝えなさい。」とイエス様は言われました。天の御国、神さまの支配される領域が近づいています。そして、私たちが悔い改めて、主に立ち返るならば、私たちも天の御国の中に入ることができます。それは、死んでから入るようなものではなく、今、自分が自分を捨て、イエス様に自分の人生のかじ取りを明け渡し、この方にお任せするなら、そこには天の御国が広がっています。自分がひざまずいて、イエス様の言われていることに聞くなら、神の国のすばらしさ、そこにある喜びや平安を味わえるのです。

1B 狼の中の羊

そしてイエス様は、そのようにご自分の前に額づく人々を通して、その人々に権威を与えられて、神の国の福音を広げたいと願われています。彼らは神の前では羊のような存在です。神はイスラエルの民のことをしばしば、羊にたとえられました。私たちも、イエス様の声に聴いているならば、イエス様の羊です。けれども、私たちがイエス様によって遣われるということは、いわばそれまで自分たちを支配し、虐げていたサタンの国、闇の国の中に遣わされるということなのです。ですから、イエス様は言われました。16 節にこうあります。「いいですか。わたしは狼の中に羊を送り出すようにして、あなたがたを遣わします。ですから、蛇のように賢く、鳩のように素直でありなさい。」

2B 主人の受けた仕打ち

ですから、自分が信仰生活を歩むということは、反対や、時に迫害があるということです。特に、自分の信じている福音を伝えている者には、直接、敵陣に入り込んでいるようなもので、あらゆる感わしや攻撃があります。

そこでイエス様は、弟子たちに大切なことを教えられました。24 節です、「弟子は師以上の者ではなく、しもべも主人以上の者ではありません。」福音の中に生き、福音を伝えても、みなが入れてくれるものではありません。いやむしろ、難癖を付けられたり、ガン無視されたり、酷い目にあうかもしれません。そうすると、自分がちゃんと伝えられなかったのではないかと落ち込んでしまいます。けれども、イエス様は「主人であるわたしでさえが、相手から悪霊かいら呼ばわりされているのだから、弟子でああなたがたに何を言うか分からない。」ということを言われたのです。だから、私たちが自分で失敗したと思っても、そんなに気にすることはありません。なぜなら、これは主のなされていることだからです。その人は、主イエスを拒んでいるので、それで私たちをも拒みます。

3B キリストの告白

その中で、私たちは恐れが出てきます。人への恐れです。自分が絶えず、神の前に生きる、キリストの前に生きるには、そういった苦しみを耐え忍ばなければいけないことがあります。けれども、そこにはもちろん、人知を超えた平安があるのですが。そこでイエス様が、人々の前でご自分を認めるものが、天におられる父の前で、その人を認める話を 32 節で話されました。

2A 平和でなく剣

このようにして、私たちがキリスト者として生き、かつこの世にキリスト者として遣わされると、強い確執が起こります。そこでイエス様は、「剣」という強い言葉を使われて、このことを教えられます。「34 わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだ、とってははいけません。わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました。」これまで平和だと思っていたところに、イエス様の福音が入ってくると、それを聞いた人々が強く拒み、それで確執が起こってくるのです。それを剣とイエス様は呼ばれています。

1B 家族関係

それが、非常に身近なところで起こってくるのです。そう家族の中で起こります。「35 わたしは、人をその父に、娘をその母に、嫁をその姑に逆らわせるために来たのです。36 そのようにして家の者たちがその人の敵となるのです。37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。」

ここは、実は私がクリスチャンとして生きていくべきなのかどうか、悩んだ時に与えられた御言葉です。私は長男でした、そしてまだ 19 歳という若さだったのに、先祖の墓の事をすぐに思ったのです。しかも最近、父が親戚を代表して新たに墓を造ったばかりだったのです。そして、両親はパブ・レストランに働いていて、お酒を出していました。いつかこのことについても、僕がクリスチャンになることによって、確執を生むのではないかと悩んだのです。けれども、イエス様は、わたしを第一に愛しなさいと言われます。そこで分かったのです、私は両親を裏切ることはない、いやむしろイエス様を第一にすることによって、親自身もイエス様を知ることができ、最も大きな親孝行ができると思ったのです。そして 2003 年、私が信仰をもって 14 年後に、二人もイエス様を信じました。

2B 社会関係

そしてイエス様は、さらに十字架を負いなさいと言われます。「38 自分の十字架を負ってわたしに従って来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。」これは、自分の負い目を負いなさいということではありません。十字架は、当時のローマ社会において、ローマに対して反逆した者たちに対して、それを負わせることで、ローマには反抗できない、服従するのだということを見せしめにするための道具でした。つまり、自分の生活の中で、社会においてどこでも、自分を神に従わせる生活をしなさいということです。自分がどんなにじたばたしても、自分がどんなに強く願っても、

それでも、主に言われたことに自分を従わせていく、ということです。

3B 自己実現

そこで初めて 39 節の話に入ります。「**自分のいのちを得る者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを得るのです。**」家族との確執が起こり、社会や日常の生活でも葛藤が起こり、けれども最も大きな葛藤は、まさに「自分」というものとの葛藤です。私たちの命は、極めて強い生存本能を持っています。自分で自分を生かすのだという強い渴望です。それで、自分の中で自分を満足することのできる意味を見出そうと強く願います。それを「自分のいのちを見出す」ということで使っているのです。しかし、それをしてしまうと逆に、自分を潰してしまうのです。イエス様は過激なことを言われました、「自分を失いなさい」と言われるのです。

ただやみくもに失うのではなく、イエス様のために失います。これは、自害しなさいとかジハードみたいな殉教をしなさいということを行っているではありません。むしろ、自害などは自分の面子を守るために行うところがありますから、まだ自分に死んでいないのです。自分を失うとは、死んでも直らない自分というものを救うことをあきらめることです。任せることです。ちょうどすれば、空中ブランコにおいて、自分がブランコから手を離して、向こう側のブランコの相手に身をゆだねるのに似ています。そこで自分の力を入れては決していけないのだそうです。自分は全く無力になって、相手を信頼して、自分を受け取ってくれるに任せるのだそうです。イエス様のために、命を失うというのはこういうことです。自分の思いや考え、これまでの生き方があっても、それに対して死に、イエス様の思いや考え、この方の生き方に身を任せることを話しています。

3A 自己中心な社会

私たちの社会は、自己実現が当たり前ようになってきました。とてもすばらしいこと、きれいに見えることを行なっても、実は自分のしたいことをやりたいという、隠れた動機があります。

1B 「自分探し」の援助活動

私たちの教会は、七年前の 2 月に始まりましたが、その一か月後に東日本大震災が起こりました。そして救援活動に何度となく行きました。ある人が、その人はクリスチャンのはずなのですが、不思議にも一般のボランティアのプログラムに参加しました。そして結果を教えてくださいましたが、みな自分探しをしている、ということです。自分が何をすればよいか分からないが、この救援活動を通して自分の価値を見だし、そこから自分を発見したいというものです。そうした援助を受けて、最も迷惑を被るのは現地の人です。本当は必要ないものを、押し付けるようにして「あなたにあげます」と言ってみたりします。また、食事や宿は自己完結で活動ができなければ、現場は負担がかかります。他者のためにしているようで、実は自分のためにしているという部分が残っているので、そうになってしまうのです。

2B 「自分探し」の弟子活動

それが、キリストの弟子たちの中にさえ起こります。弟子たちは、イエス様によくついて行きました。ところが、イエス様が、ご自身がキリストであることを明かした後に、十字架に付けられ、三日目によみがえることを語られました。そして、ここでも言われたように、自分を捨てて、日々、自分の十字架を負い、そしてわたしに付いて来なさいと言われました。ところが、弟子たちが、だれが御国の中で、イエス様の右の座に着き、左の座に着くのかという議論を行っていたのです。イエス様に従っていると言いながら、自分自身を認めてもらおうとしていたのです。

私たちの善意と呼ばれているものが、果たして自己満足や自己実現になっていないかを吟味することは必要です。果たして、それが相手にとって益になっているのだろうか？ただ、自分がキリスト者らしく動いていることだけに自己満足していないだろうか？イエス様に従っているとしながら、みなさんの益、教会の益になることではなく、自分がしたいから、自分が願っているからということで動いていないか？

ダビデが、クーデターを起こした息子アブサロムの軍と戦った時の事です。ダビデの將軍ヨアブが、アブサロムを突き刺し、殺しました。それで戦いはダビデの側が勝ちました。その知らせをすぐにでも、王ダビデに知らせたいと思い、ツァドクの子アヒアマツがヨアブに申し出ました。「なぜ、走っていききたいのか？」とヨアブが言ったのですが、アヒアマツはとにかく行きたいと言いました。実は、ヨアブはダビデの息子アブサロムが死んだということはダビデを非常に悲しませるので、あえてユダヤ人ではなくクシュ人を選んで、彼に走って伝えるようにさせていたのです。けれども、アヒアマツはクシュ人よりも早く走り、ダビデのところに来ました。そして、ダビデに戦いに勝利したことを伝えたのですが、アブサロムが無事かと尋ねられても、「分かりません」としか答えられませんでした。そしてクシュ人が来ました。アブサロムが死んだことを告げたのです。

アヒアマツにとって、主君ダビデのために喜ばしい知らせを持ってきたいと思ったのです。けれども、問題はその喜ばしい知らせ自体をしっかりとっていないのに、ただ走り出したのです。それで結局役に立たず、自己満足の領域を脱していませんでした。クシュ人は、悲しむべきことも含めて受け入れ、それを持って行ったのです。私たちは、自分が願っていることではなく、確かに主が任されていることをしっかりと受けとめ、そしてそれに自分を従わせる必要があります。

3B 探せば失う原則

自分のいのちを見出すこと、自分探し、自己実現、自己確認などをしていると、結局、自分の心には絶えず葛藤があります。いつも同じ辛い思いをして、心に平安がありません、いのちを見出しているつもりが、いのちを失っているのです。

4A 失うから見つける命

1B キリストに満たされた生活

しかし、自分のいのちを失うことは、幸いなのです。失っているから、その分、キリストの命が自分にあふれるからです。自分で自分を救おうとする時に、落ちて行ってしまうのですが、救うのをやめるときに、まことに救うことのできる方、キリストによって救われます。

実は、ここのイエス様の箇所も、私を救った御言葉でした。私は、高校生の時に抑鬱で苦しみました。辛うじて大学に入学でき、その年末のクリスマスの時に初めて悔い改めの祈りをささげ、はっきりと告白したのは翌年の4月1日です。けれども、その後も抑鬱の症状は出ました。ある時に決めました。「神さま、私はほんとうに情けないものです。ぼろぼろです。虫けらのような存在です。けれども、このような惨めな状態のままでもいいのであれば、これを受け入れます。神の栄光が現れることであれば、このままでいいです。」と祈ったのです。すると、治ってしまいました。自分で自分を救うのをやめ、神に任せてしまったからです。いのちを失ったら、それを見出しました。

2B 真の喜び

このように、自分をまかせてしまうこと、自分を差し出してしまうことに、真の喜びがあります。自分が受けようとするのではなく、与えることによって、神がそこに喜びを満たして下さることができるのです。私たちは、捧げるために生きているのでしょうか？パウロは、神のあわれみにしたがって、自分自身を生ける供え物として捧げなさいと願いました。教会においても、自分を捧げる生活をする時に、真実な喜びを見いだすのです。

3B 真の平安

そして真の平安を見出します。なぜなら、自分を捨てれば、イエス様が支配して下さるからです。自分のことを自分で管理しようとするから、葛藤がずっと続きます。けれども、イエス様に管理していただくならば、イエス様がして下さいますから、安心できるのです。「ピリピ 4:6-7 何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、すべての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」

ですので、自分を見出そうとするのか、それとも自分を失う、あきらめるのか、二者択一です。自分というものに死ねば、主が生かして下さいます。自分で自分を生かそうとすれば、自分が死んでいきます。矛盾しているように見えますが、そうなんです。その矛盾を埋めるのは、イエス様ご自身です。自分に死ねば、イエス様が生きて下さるので生きます。自分を生かそうと思えば、イエス様を心の王座にお迎えすることができません。